COC事業ニュースレター　神戸市看護大学 KOBE CITY COLLEGE OF NURSING　文部科学省 地(知)の拠点

市看×いちかん ちいき通信

2017年 秋号

2017年9月10日　発行

いちかん…神戸市看護大学の略称「市看」
「(い)っしょに (ち)いきづくりについて (かん)がえる」をコンセプトにしています。

今号の内容

P1　・地域を耕す
・COCコラボ教育ピックアップ
P2～3　COCフォーラム
・地域の顔
(須磨区横尾児童館館長
田中準三さん)
・地域つくり・健康つくり
(訪問看護・リハステーション
ラヴィー副所長
中村竹男さん)
・コラボ教育での学び
(多職種連携
地域連携を学ぶ)
・COC研究ひろば　第9回
(地域・在宅看護学
都筑千景)
P4　活動予定

地域を耕す

神戸市看護大学　地域・在宅看護学分野　教授　片倉直子

精神科医の中井久夫先生は、著書『こんなとき私はどうしてきたか』(2007年，医学書院）の中で、次のように言っています。

「病院で患者さんのそばを通り過ぎるときにも、頭を軽く下げて挨拶するということが大事だと思います。われわれは「仕事を急いでいます」とばかりに患者さんのそばをピャーッと通り過ぎがちなのですが、あれは患者さんから見たらさぞ「自閉的」に見えるでしょうね。あるいは「おまえはカウントしない（数のうちに入っていない)」と。」(p.74)

中井先生は、病院の廊下を行ったり来たりして、出会う患者さんに挨拶することを「荒れ地に鍬を入れるように病棟を耕しているようなもの」と言っています。そのうちに何かが変わってくるとも。具体的にケアをしているわけではありませんが、すれ違う時に挨拶するだけで、眼中にあることを相手に伝えることができるのでしょうか。そうであれば、医療者のする会釈や挨拶は、礼儀のみならず、患者への関心を無言で伝えることのできるコミュニケーションツールになり得るでしょう。

中井先生は病院のことをあげていましたが、これを生活圏に広げていったらどうでしょうか。ひとりひとりの医療者が意識的にすれ違う人たちに会釈をしていけたら、このコミュニケーションがその地域にすむ人々の気持ちを耕すことになるのではないでしょうか。訪問看護師だった私は、学園都市駅から大学まで歩く時、最近、すれ違う人に、ちょっと恥ずかしいですが会釈をするように心がけているところです。

COCコラボ教育ピックアップ　～2017年春から夏「基礎看護技術演習Ⅲ、健康行動論」～

全卒業生が地域住民の健康と暮らしを理解し、より健康となるための支援について考えられるよう、COC事業では1～4年の全学年において地域連携教育を展開しています。これまでは各学年で演習を実施していましたが、今年度は健康づくりにむけた支援方法をより理解できるよう、住民の健康アセスメントを行う2年生の「基礎看護学技術演習Ⅲ」と、健康相談・保健指導の一連を学ぶ4年生の「健康行動論」の演習を合同で行いました。演習は2年生が測定した血圧や栄養状態のアセスメントシートをもとに、4年生が健康相談を行うものです。初めて住民を対象に血圧を測定する2年生が、途中4年生の手を借りて測定、住民への説明を行う場面もありました。学年が混合で演習を行なう機会が少ない中、学生にとってはこれまで学んだ知識や技術を振り返るよい機会になったのではないかと思います。

（神戸市看護大学　地域連携教育・研究センター准教授　相原洋子）